

## 災害に遭ったら・・・

昨年暮れのインド洋津波、8月のハリケーン・カトリーナ襲来、10月のパキスタン・カシミール地方の地震などの大きな自然災害が世界中を恐怖のどん底に陥れている。例外に洩れず、日本列島も大型台風がいくつも通り過ぎ、各地に甚大な被害をもたらした。こうした自然災害予防は手の施しようがないが、それでも普段の準備と訓練次第では、その被害も多少は軽減することができる。一方で人災や不注意による災害には、ことさらに確な判断、すばやい初動、果敢な脱出などが求められる。それには、平素からの用意周到な準備と迅速な対応が欠かせない。

いまから十数年前に団体旅行添乗員として、海外で2度もホテル火災に遭遇した。いずれも事前研修に熱心な教育者の団体であったために、出発前に事故や災難にも万全の準備を整えた。「ホテル火災の際は・・・」などと出発前にはやや現実味のない説明であったが、緊急連絡網まで決めて、出かける前の用意は周到であった。最初の火災では、ホテルの火災警報によって全員を叩き起こし、ホテルの外へ脱出するまでの時間のかかり過ぎが、大火だったら大事に至ったであろうとの反省が残った。2度目の明け方のボヤでは、連絡網を通して全員がすばやく避難した。しかし、鎮火作業が終わってから、人員点呼して初めて団員のひとりが足りないことが分った。しばらくすると恥ずかしそうにそのひとりが現れた。けたたましいサイレンや、周囲の雑音にもまったく気づかず、ぐっすり眠り込んでいたようだった。相部屋の仲間はすでに避難したと思い込んでいたと話してくれた。

混乱する現場では、いくら訓練を積んでいても周章狼狽ぶりは遥かに想像を超える。日頃の訓練、心の準備、冷静沈着、決断力、行動力は必須であるが、それも結局当事者の細心の注意力や勘、センスが伴わないと災害から免れることはできないと改めて痛感した。

(近藤)